

## 第五部 白衣の賢者

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

大人になりたい。

確か、何かでフウルウが『大人』に噛み付いた時だったと思う。

中身はよく覚えていない。累進課税は一生懸命働いて、金持ちになった者たちに不公平ではないのかとか、農地改革で土地を手に入れた小作農はいいが、土地を強奪された元地主はどうなるのかとか、国債が焼きついた時、どうして、国債非所有者も損害を被るのかとか——子供じみた疑問だった。無論、前二者に関しての、満足のいく返答はなかなかいだろう。が、納得のいく返答はいくらでもあるだろうし、最後の一つに関しては幼稚な疑問としか言い様がない。そして、三つとも、子供でも、自らの思考の内で氷解できる疑問で、実際フウルウはそうした。

肝心なのは、そんな子供の簡単な疑問に、返答すべき大人が返答しなかったことだ。答えるのが面倒だとか、時間がないとか、自分で考えろとか、あるいは『わからない』でもいい。ちゃんと、答えてほしかった。何故、そこで、『そういうものなのだ』とか『理屈ばかりこねるな』と誤魔化そうとするのだ？

幼い頃に抱いた思いは年を経ると大きく、激しくなっていた。それが憤りに醸成されるまで大した時間を必要としなかった。

従順に暗唱を繰り返す対象が欲しいのなら、鸚鵡おうむでも、相手にすればいい。しかし、相手は鸚鵡ではなく、人間なのだ。そもそも『そういうものなのだ』ですませていたら、問題は一つも解決しない。理屈という、万人共通の論理体系を運用せねば、社会の維持もできない。教育の意義とは一体何なのか？

それだけではない。自分が子供じみた疑問を口にした時の同輩の態度に、フウルウはさらに腹立った。彼らは疑問を示した者を馬鹿にする目線を送ってきたのだ。当初こそフウルウも焦った。周囲の者にとって、それらは既に承知の事なのかと誤解したのだ。しかし、事實は全く逆で、彼らは、ただ大人の言う事に追従しているか、考えることを面倒がっただけだったのだ。曲学まがく垂世あせの類や、自我を放棄し、自由から逃避し、望んで傀儡となる連中と自分が肩を並べねばならないことに、フウルウは虫唾が走った。

無論、当時から、それらが若さ故の憤りであることは承知していた。だが、悟達ごたつと諦観は同義ではない。この憤りを嘲笑う者は衰退の道を突き進んでいるのだ。それも、周りのものを巻き込んで。

そんな想いはますます堆積し、増殖していった。自分の憤りに誤りが含まれていることもわかるようになっていたが、その誤りを論理的に解説せず、盲目的に否定するだけの大人にさらに腹が立った。そのうち彼の知識と地位は多くの大人を凌駕するようになったが、フウルウの感情のうねりはやはり消えなかった。消すべきでもなかったと思う。そして、ある事柄（実はよく覚えていない。多分、それ自体は大したことではなかったのだろう）が、きっかけでそのうねりが表に現れた。

「……………だろ！！」

フウルウ、現実はそのようなものではない。

「どこがどういう風に、だ？ あんたの言っていることは常に根拠に欠ける！ それではいつまでも平行線だ。条件闘争にならないではないか！ 餓鬼ではあるまいし、自分の要求が悉く通らねば、気が済まないのか？ 違うだろう？ あんたらは、もう立派な大人だろう！ そもそも、違うから違うんだという論法では、我々が理不尽な要求を突きつけられた時、対抗する術がないではないか！」

………。

「確かに、机上の空論というものはある。だから、試してみようと言っているんだ！」  
我々は昔から、こうやってきた。

「これが伝統だというのか？ ならば、なおのこと新しい方法を試す必要がある。伝統とは陶冶薫陶を経た故に伝統であり、だからこそ、伝統には価値がある。ならば、俺達も先人達と同じ様に、更にそれに磨くべく努めねばならない！ 後世のために少しでもよりよい方法を探さねばならない！ それが先人達の知恵の恩恵を受ける者の務めだ！ 数多の先人達の努力の上に安住し、それに対する感謝を忘れ、ただ無為に時を過ごすなど、単なる怠惰だ！ 先人達への侮辱に他ならない！」

気にくわんのならば、出てゆけ！

「何でそうなるんだ！ 俺はあんたらが嫌いだから、反対しているんじゃない！ もっといいやり方があるから、改善しろといっているんだ！ 大体、俺が出て行っても、何の解決にもならないだろう！ 俺の後輩が苦労するだけだ！」

そんなことは貴様が考えなくともよい！

「……俺はここまで育ててくれた親を嫌いになるほど不孝者じゃあない。俺はあんたらが、好きなんだ。嫌いだったら、とっくに出て行っている。でも、俺はもっとあんたらを好きになりたいんだ！ 頼むから、愚かなことを言わないでくれ！ 俺を失望させないでくれ！」

戯言はいい！ とっと、出ていけ！

「……ああ、わかったよ！ 母語すら、まともに解せない族やからと話すことはない！ 心中する気もない！ こんなところ、出て行ってやるさ！」

\*\*\*

「………なんと**い**うべきか。若気の至りの見本みたいな夢だったな」

何故が醒めたくないと思っていたが、夢だということはわかっていた。随分と省略された部分が多かったし、フウルウの視点が随分と歪だった。当時はあんな風に感じたものが、今、考えてみれば、あの頃のフウルウは性急で傲慢で、客観性に欠け、かつ、視野が狭かった。この『思出』にも多分にフウルウの主観が入っているだろう。さらに、怒りの後の行動は愚かとしか言い様がない。この場合の『若気の至り』の主張自体は間違っていないかったのだから、なおさらだ。フウルウは正しい主張を誤った行動によって、自ら辱めたのだ。

「実に若かった……。しかし、ここは……？」

思索を一段落させたフウルウの目の前には、青々とした稲が並んでいた。田圃——しか

も、水田で、傾斜が結構あるのか、それは階段状になっている。

「わざわざ棚田にして？」

アツザフルにも田圃はある。しかし、本来、低地に成育する稲を、無理矢理、傾斜の激しい土地で育てるために棚田にするなどアツザフル人には思いもつくまい。それ程の時間と時間をつぎ込む位なら、他の土地利用を考える方が賢明だろう。そんなことをするのはよほどの趣味人か、盲目的なまでに米を重視し、稲を育てることを他の何よりも優先する文化圏の人間のどちらかだ。

先ほどの夢が影響しているのだろう。フウルウは奇妙な感傷に囚われた。

「我考何如？ 票撫鹵（私は何を考えているのだ？ ピャオ・フウルウよ）」

つい故郷の言葉、《夏の国》の言葉、夏語が出た。

撫鹵——鹵を撫でるもの。

この《鹵》とは塩地、塩土、すなわち、アルカリ性塩分を多量に含む不毛なる土地を指す。そんな場所でも、決して見捨てずに《撫》で親しみ、作物を育てる様な、粘り強く、そして、優しい人間になって欲しい。そんな親の願いが込められた名前。

「然而、我為棄郷者（でも、私は故郷すら切り捨てる人間になったんだよな）」

ここはあの捨ててきた故郷に、いささか似ている。

勿論、ここが故郷である筈がない。だが、いざ懐かしい光景の前にたつと、遠い故郷を彷彿とせざるを得ない。ふと、目頭が熱くなるのを感じた。

「子、醒寤乎（お目覚めですか）？」

かなり訛った夏語に思わず、フウルウは振り向いた。

それは鋏を携え、山羊を引き連れた男だった。

いかにも、農夫といった風貌——いや、農夫にしては体格が貧弱すぎるか？ 三・五ク—デ（約百七十五センチ）を超えるほどの身長に対して、薄手の衣から垣間見える肉付きはあまりにも悪い。白いさらしを巻いている両手両足は木の棒のように細く、その胴もすらりというよりも、ひよろりといった感じだ。血色を見る限り、病や飢えの気配はないが、風が吹けば飛んでいきそうな印象すら受ける。干渉力も極端に小さい。あまりにも、彼の干渉紋が小さいので、一瞬、フウルウは彼が先天的干渉力欠落症——いわゆる鬼子——なのではないか疑った程だ（一応、かすかに干渉紋を感知できたが）。

——しかし……。

少しばかり、フウルウは戸惑った。樹皮の様な褐色の肌からして、彼は南方系だろう。つまり、彼はフウルウと同じ《夏の国》の者ではない。

そんな彼が、何故、いきなり夏語で話しかけてきたのだろうか？

フウルウより年上に見えることも、相成って、それなりの成熟は感じるが……正直、そんなに教養の深い人間には見えない。

曲がった背筋。海狸の様な前歯の見える半開きの口元。何だが切り方が大雑把な波状毛の黒髪。目蓋が重く、開いているだけでも大変そうな細い焼け土色の眼。なにより、本人は友好的な笑顔のつもりなのだろうが——容姿を持って人を判断するのは愚ろかだとはわかってるもの——その表情は阿呆みたいに見えるのだ。

「……子、可話夏語乎（夏語を話せますか）？」

と、彼は自信なさげに尋ねてきた。色々黙って考えている間に、彼は疑念を抱いたらしい。

フウルウは慌てて、「阿、我可話（あつ、話せますよ）」と答える。

すると彼は安堵の微笑を浮かべる。そして、

「善哉（それはよかった）。我、我……」

と、そこで彼は言葉に詰まった。額にも汗が浮かぶ。そして……、

「えーと、母屋ペイトって、夏語でなんて言ったわけ……ああ、もう『正房』でいいか。我将：従正房：取辞書？　なんか変な感じもするけど、よし、これでいこう……！」

と、彼はいきなりアツザフル語でブツブツと呟き始めた。それも、鶴を思わせる古風で流暢なアツザフル語だ。それまでの稚拙な夏語とは対照的だった。

その上、最後には拳を握って、彼は叫んだ。

「我将従正房取辞書（私、今、正しい家から辞書を取ってくる）！　是希待（ここで待て）！」

……色々懊悩していたその様子は実に滑稽だった。このまま夏語で話を続けようかと、フウルウは一瞬意地悪なことを考えたぐらいだ。しかし、その思考があまりにもディーナザードにそっくりであることに気付く。だから、フウルウはすぐに指摘した。

「……あの、私はアツザフル語を解せますよ」

「え、あ、そうなの？」明らかに彼はほっとした様子だった。「いやあ、よかった。何だが夏語シヤで独り言を言ってたし、見掛けもそんな感じだろう？　てっきり『夏の国』の人かと思っただよ。でも、僕は夏語シヤをすっかり忘れちゃててさ」

「私は『夏の国』出身ですよ。ただ、アツザフル語は勉強しています……ええと……」

フウルウが口ごもっていると、彼は沈黙の意味を察して、自分から切り出した。

「僕はマジヌーンだよ。よろしく」

「氏ビヤオを票フウルウ、名を撫フウルウと申します」

「字あきなは？」

「……ありません」

「へえ」マジヌーンは少し驚いた様子だった。「ひよつとして、見かけより若いの？」

夏の国では教養人の多くは成人になると本名とは別に字をつける。例えば、鶴の師母たる女媧娘々（氏名を鵬翦）の字は雛子だ。そして、よほど親しいものでない限り、この字で呼び合うのが礼儀とされている。マジヌーンはフウルウを教養人と考えたらしく、ならば、当然、字を持っているだろうと思ったようだ。だから、字を聞いた。しかし、意外にもフウルウは字がないと答えたので、マジヌーンはフウルウの年齢を疑ったのだろう。実際、若い頃、周りから早く作れ作れとせつつかれたのだが、フウルウが『名前が幾つもあるなど不合理だ』と主張していたのだ。今考えれば、いかにも子供っぽい反抗だった。

「いえ、もう三十です。字についてはあまり気にしないでください」フウルウは曖昧に濁した。こんなことを初対面の人間には話せない。「どうお呼びになっても結構です。もし、

諱を呼ぶのが、気になるようでしたら、票ビヤオ太郎イランとでも」

「ふうん、ではピヤオ殿、体の方は大丈夫かね？　いきなり、用水からドンブラコドンブラコと流れてきたから、びっくりしたんだから」

ふと、自分を観察すると、いつの間にか、服と肌の間に布が挟まれ、多少の保温が成され、わざわざ風通しがよくて、不自然なくらい虫のいない木の陰に寝かされている。

「おまけに、ちゃんと呼吸も脈拍もしっかりしているのに、何故か半日経っても目を覚まさない。ひよっとして、植物状態の類かと僕は本気で焦ったよ」

フウルウは慌てて頭を下げた。彼がここに自分を運んだ——運んでくれたであろうことに、ようやく気付いたのである。

「ああ、それはご心配をおかけして、申し訳ありません。また、我が身を助けていただき、真に……」

フウルウは本心からの感謝の意を懇切丁寧に示すと、傍目にもはっきりとわかるほど、マジユヌーンは照れ出した。今まで明瞭だった発音を途端にモゴモゴさせて「いや、その、そんなに大げさにされると、こっちも……」と明らかに困惑していた。

ふと、フウルウの脳裏に

——褒められることに慣れていないのだろうか？

とまた失礼な考えがよぎる。それと同時に、マジユヌーンの言葉を反芻していた。

植物状態だったという事はなかなか危ない状態だったのだろう。だから、フウルウの中に眠っている施術者の支配下にある精霊結晶が、肉体の危険を感知すると同時に緊急生命維持用巫術を発現させたのだ。鶴が仕掛けておいた安全装置が功を奏したというわけだが……

「そうだ！ 鶴っ、鶴姫命っ」

既に半日近く経っているのだ。空を見上げれば、太陽も既に中天に差し掛かろうとしている。自分がいないことにもとくに気付いているだろう。用水で溺れたことも知ったかもしれない。まったく、主を守護すべき傀儡が主に心配かけてどうするんだ！

「……『鶴』っていうと、頭が猿で、手足が虎で、尻尾が蛇っていうあれ？」いきなり焦るフウルウにマジユヌーンは怪訝な目つきで、「でも、あれは多分空想上の産物だよ」

「違います」

「じゃあ、虎鶴とらつぐみのこと？ でも、ここらへんには棲息していない筈だけど」

「それも違いますっ」

「ああ、正体不明の何か、あるいは《化け物》に対する隠語？」

「可愛い女の子ですっ！」

鶴を《化け物》扱いされて、思わずフウルウは憤る。

「ふーん。ところで、君は何故、《根の国》の言葉を知っているんだ？ 君の容貌とさつき

《夏語》を話していることから察するに、君は《夏の国》の出身だと思ったのだがね」

フウルウは反射的に男から離れた。

「……あなたこそ、随分とお詳しいですね？」

彼の発言に間違いはない。確かにフウルウは《夏の国》出身だ。そして、地理的に《根の国》から、《夏の国》経由でアツザフルに来ることはあっても、《夏の国》から《根の国》を経由してアツザフルに来ることはまずない。だから、フウルウの行動に彼が興味を抱いたとしてもおかしくはない。

しかし、普通のアツザフル人にしては詳し過ぎる。《夏の国》と《根の国》の区別がつくだけでも、十分奇妙だ。初等教育ではにくりに《東方》と表現される。実際、アツザフルで生活するのなら、その程度の認識で十分だろう。だから、高等教育を受けた人間でなければ、二つの国を区別することは難しい。そして、高等教育を受けた農夫というのは希

少である。ましてや、『鵠』という固有名詞まで知っているなど……。

そもそも、鵠を思わせる古風で流暢なアツザフル語という時点で怪しい。大体、このマジュヌーンなる男、語順が動詞・主語・目的語になっているのだ。文語ならともかく口語で主語の前に動詞が来るなど尋常ではない。夏語で言えば、名詞・形容詞になっているようなものだ。

少し前までなら、ここまで過敏には反応しなかっただろう。しかし、昨日以降、二度にわたって出くわしているあの警官たち、さらに《再生への導き手》とのことを鑑みれば……、その珍しい人間に偶然出くわしたとは考えにくい。

「そんなに警戒しないでくれよ」マジュヌーンはすぐに宥めにかかった。「まあ、こんなところに一人で住んでいるから、変人だと思われる仕方ないけどね。この農地も結構変わっているしさ……」

言われて初めて、フウルウは周囲の農地を冷静に観察し始めた。

すると、確かにここの農地はいささか奇妙だった。主要作物が稲なので、フウルウの目はついついそこにはばかり行すが、気になる点はそこだけではない。

第一に虫がいない。場所によってはうじゃうじゃいるのだが、絶対数が少なく、所によってはまったくいない場所がある。

第二に雑草も少ない。ただし、こまめに草取りをしているという感じではない。作物はすくすく育っているのに雑草だけが茶色く枯れている場所がいくつもある。

第三に（これはマジュヌーンの言葉で納得したのだが）農地全体が周囲から隔絶され、独立しているのだ。全方位が緑豊かな小山に囲まれ、《乙女の泉》の中の一角であるということ意識させない。水もフウルウの流れてきた用水にのみ依存しているのではなく、独自に井戸を引いているらしい。ちなみに、用水路だが、ここは《乙女の泉》の最下流の一つであり、ここより下はないらしい。ただし、ここに流れ込んでくるのは用水路の水全体からするとほんの一部だという（さりげなく、用水路に落ちた場所からここが特定される可能性を尋ねてみると、それはほとんどないとのことだ）。これは追われる身のフウルウにとってはありがたい話だ。しかし、ここに住んでいるマジュヌーンにとっては不便極まりないはずである。

第四に作物の種類が豊富だった。極めて多くの種類の作物が生産されている。中にはどこから入手したのか、まだまだアツザフルでは普及していない異大陸の赤茄子まである。しかし、農地全体の面積比からすると、作物の種類が多すぎる。一つ一つに色々手が加えられるようだが、これでは生産性が芳しからざるものになってしまう。

「それでも、探究士の端くれだね」マジュヌーンはフウルウの疑問が高ぶったところで、その理由を告げた。「趣味の悪い昔馴染みが残した資料を基に殺虫剤や除草剤――まあ、平たく言えば農薬全般の研究をしているんだ」

「ああ、なるほど」

と、フウルウは納得した。それなら、害虫や雑草が少ないのも、理解できる。また、実験対象の種類は多い方がいいだろうし、外部への汚染に気を遣って、こういう環境で生活しているのだ。それに学者なら、ある程度の教養も当然だろう。もつとも、探究士という呼称は今時ちょっと古臭いと思ったが……。

「君の精神衛生のために言っておくが、ここで使っているのは一定の安全性が確認された

ものばかりだ。長期的な毒性を調査するためにここで色々やっているけれど、ここにちょっと足を踏み入れた程度での毒性は皆無といってもいい。僕の誇りを賭けてもいいよ」

「信頼します」

「嬉しいね」今度のマジヌーンの態度は堂々たるものだった。「さて、君の不安が解消されたところで尋ねたいのだが……先程の鶴という名の可愛い女の子はどうかしたのかい？」

いささか、嫌味を含んだその一言はフルウの心の羞恥心を刺激した。が、今思えば、あれは己の本心なのだろう。

——そうだな。自分はその少女を愛している。だから、あの娘との諍いがあんなにも辛かった。人に蔑まれることには慣れているはずのこの私が……。

「どうかしたのかい？」

「いえ、やはりそれについては問題ありません。私はあの娘を信頼しています。きっと向こうから、こちらに来るでしょう」

決然たるフルウの声にマジヌーンは「おおー」と何だか意味を図りかねる声を漏らしたが、半分以上は事実を告げただけだった。

冷静になってみれば、鶴とフルウは繋がっているのだ。互いの無事も位置も把握している。まず、危険兆候を示すような焦燥の類がないことにフルウは安堵した。しかも、鶴の方がこちらに向かってきている。そして、かすかにだが、鶴の中に感じられる不安と後悔と決意——フルウと同じだ。再び顔を会わせ、腹を割って話し合い、二人の間にあったものを築き直したいと思っているのだ。

「でもさ、どうしてその鶴という女の子は君がここにいとわかんんだい？」

……さて、鶴と話し合う前に、この人にどう答えるべきか？

もっともすぎる疑問に、フルウは少しばかり悩んだ。

\*\*\*

必死になって、フルウがマジヌーンを誤魔化した後、二人は彼の家に用意してあるという代えの服をとりに行くことにした。念のため、フルウが流れ着いた場所に書き置きも残しておいたが、鶴ならまっすぐフルウの所に来るだろう。

マジヌーンの家はいかにも田舎住まいの学者の家といった感じだった。要するに、質素だが、散らかっていて、書物と書置きが山のようなのである。また、フルウが常々読みたいと思っていた歴史書もあれば、あまり縁のない薬品瓶や試験管なども多い（勿論、中には嚴重に管理してあるものもある）。加えて、金には不自由していないらしく、装飾品の類はまったくなくないものの、必要なところには惜しげもなく希少金属や精霊結晶が使われている。

フルウが着替えを済ませると、マジヌーンは——化学式や数字の書き殴りで埋まっていた机を掘り起こし——気付けに、茶チャイと炒飯パエリヤを用意していた。

マジヌーンが「ちよっと、汚いけれど」と評した硝子食器はその言葉とは裏腹に、異様な程に綺麗だった。

……問題はその食器が本当に食器として作られたのか疑わしい形状——目盛りがついて

いる円筒形——をしていることだ。付け加えれば、その料理が入る前に何が入っていたのもいささか気になる場所である。

しかし、結局、フウルウは食欲に負け、その炒飯パエリヤに手をつけた。

炒飯は玉葱の甘味がたっぷりで、卵の舌触りがふわふわ——ディーナザードと違い技巧を凝らしてはいない素朴な調理だが、しかし、なかなかの味だった。この頃にはフウルウはすっかり心が安らいでおり

——彼にも化学者としての誇りがある。残留物などありえまい。日頃から実験の精度を維持するため、わずかな異物にも注意しているはずだからな。

という気分になっていた。実際、この手の食器も自然哲学者にはよくある話だろう。

そう考え、茶を口にし——その味に驚いた。

茶は比喩ではない、本物の茶葉茶チャイエチャだったのだ。ツバキ目ツバキ科ツバキ族チャノキを加工した真性の『茶』だったのである。この時代、このような本物の茶は高級品であり、庶人の口には一生入らぬことも珍しくない。そもそものは『剣』と同様、貴人のみに許された品であり、民間市場に出回ったのは、易姓革命以後のことなのだ。近年では、栽培運送技術の進歩で単価も下がり始めているものの、未だ、その扱いは病人に与えられる薬のようなものである。

実際、フウルウも故郷を出てからは、ほとんど口にしていない。シャービス亭で口にしていた『茶』も、よくて、茶に似た椿の類を加工したもの、下手をすれば、そこら辺に生えている菓草を調べて煮詰めたものに過ぎない（そういった創意工夫をフウルウは素晴らしいと思うし、実際、凝り性であるディーナザードの『茶』は、味も質もは茶葉茶チャイエチャに劣るものではないが）

フウルウが驚いた視線をマジヌーンに向けると、彼は平然と

「あ、珈琲カフワの方がよかった？」

尋ねてきた。原産地に近い分、茶チャイほどの貴重品ではないものの、珈琲カフワにしたところで決して安価な品ではない。フウルウは「いえ、お茶で十分です。むしろ、お茶がいいです」と返しながらも

——この男、何者だ？

という思いを強くしていた。正直な話、フウルウは戸惑っていた。

すると、マジヌーンは色々とフウルウの事情について尋ねてくる。

当然のことなので、フウルウは当たり障りがないように答えた。そうして、フウルウが歴史学者志望であることを告げると、マジヌーンは幾つかの歴史上の疑問を当然の如く尋ねてきた。もつとも、これはフウルウも同じである。化学の類は専門外といえ、幾つかの疑問はあり、論議を交わすのは嬉しいことだ。そうやって、有意義な時間を過ごしている間にフウルウはマジヌーンに確実に友愛を覚えていた。マジヌーンの方も同じだろう。鶴との関係とは違って、こちらについては自信がある。マジヌーンの口は学術的な話題の時は口が滑らかなのに、日常的な話題になると、瞬く間に重くなる。特に世俗の流行や世間話の類になると、明らかに彼は戸惑っていた。相違点は山ほどあるが、こと人付き合いの下手さについては同類のようだ。

そんな風に（相手の正体を探ることを忘れる程）論議を楽しんでいると、フウルウは鶴がもうすぐ側まで来ているのを感じた。

「あ……：鶴が、こちらに着いたようです」

「……ねえ、どうして、そんなことがわかるんだい？」

「ふふ」ごく自然にフウルウは笑みを零した。「ひょっとしたら、あの娘に説明してもらうことになるかもしれませんね」

「なんだよ、それ」少し拗ねた声をマジユヌーンは出した。「しかし、これは警報装置の再考が必要だな」

「警報装置？」

「ああ、ほら、ここでは危ない薬も外に出しているからね。知らずに子供なんかやっつけて悪戯されると、とんでもないことになる。だから、一応、この辺りに入ってくる人間は一通り監査しているんだけど、今回は反応しなかった」

鶴が警報装置に気付いて、それを避けたのか、あるいはマジユヌーンの警報装置そのものに不備があったのか——フウルウがそんなことを考えていると、

「……フウルウさん？」

「……：鶴だね」

家の外からの扉越しに響く少女の声に壮年は答えた。

「えっと、とにかく、まあ、なんだな」フウルウは用意しておいた言葉が出てこなかった。「とにかく入ってこないか？ あ、いや、ここは人様の家なんだが、許可はもらっているし、立ち話もなんだし、その……」

……しどろもどろになっていたその時、フウルウは鶴の声にマジユヌーンが表情を消していることに気付いていなかった。

\*\*\*

「シヤムハトよ。これを」

勝婢よゆうひの一人から、連絡を受けたシヤムハトは、大地に記された書置きを目にした。続いて、他の勝婢たちにも目を通させる。皆、無言であったが、その意は解している。自分たちは無教養な庶人どもとは違う。識字率は十割だ。例えそれが庶人たちの手によって、歪なまでに単純化されたものであっても、文字は読める。何しろ、これは元々自分たちの祖霊が神々と交わるために編み出したものなのだ。

「ついに見つけましたよ。《アルシヤイターナフ・カバール・アズワド黒衣の魔女》。そして、その《ククヅツ傀儡》」

\*\*\*

こちらもしどろもどろになっていた鶴が家に入り、フウルウとマジユヌーンの目の前に立つと、幾つかのことが同時に起こった。

まずマジユヌーンが、明らかに驚いた顔で、鶴を凝視し、目をぱちぱちさせて……、

「阿翦……：？」

と呟き。

鶴も驚愕の顔で、マジユヌーンを凝視し、同じく目をぱちぱちさせて、こちらはさらに懐から、一枚の写真を取り出して、何度か写真とマジユヌーンを見比べて……、

「あ、アルⅡイクシルっ？」  
と叫ぶ。

たったそれだけのことで、フウルウは混乱した。

鵜の言葉を素直に取れば、マジユヌーンこそが鵜の捜し求めていた師匠の仇であるアルⅡイクシルということになる。

また、マジユヌーンの言葉を素直に取れば、鵜こそが鵜の師母である女娼娘々——本名じよかにやんにやん鵬ほうせん翦せんということになる。おそらく阿翦あせんというのは彼女の諱である翦を元にした小字（幼名）だろう。記録によると、アルⅡイクシルは女娼娘々と幼馴染でもあったらしい。だから、とっさに小字が出てきてもおかしくはない。

さらに、ここは目的地であった《乙女の泉》の第十三地区八番地となる。

加えて、あの写真はフウルウもアルⅡイクシルに関する資料として見せてもらったが、誰かが怒りに任せて滅茶苦茶に落書きをした上に、釘を刺して、鋏で切り刻み、火を着けた時に別の用途を思い出し、接着剤で復元したという痕跡が見られた。常人にはとても個人の識別できるものではないそれで確認を取る辺り、どうやら、鵜の目はなかなか便利な構造になっているらしい。

……そんなことが頭に浮ぶほど、フウルウは混乱していた。

「アルⅡイクシルっ！」

突然の硬直を真っ先に破ったのはやはり鵜だった。なにせ、彼女の言葉が事実なら、半年間、探しに探していた仇に、いきなり出くわした事になる。

鵜はすぐに、《夔》を取り出し、大鎌を形成した。

一方のマジユヌーンはその異形にはなく、別のことに驚愕しているようだった。

「えっ……女娼泥ユニット？ これは無支祈システム《夔》か……？ なら、やっぱり阿翦？ いや、違う？」

「そう！」鵜は胸を張って答えた。「これがお師匠様の《夔》の後継種——無支祈システム搭載型女娼泥ユニット二号体《夔》よっ！」

「……の割にはあんまり……」

「貴様のせいでしょうがっ！ マジユヌーン・アルⅡイクシル・ディアウス・イブンⅡラフマーンっ！！」

フウルウには理解しかねる二人の会話の結果は、やはり鵜の激怒だった。

「お師匠様の仇っ！」

ただ驚くばかりのマジユヌーン・アルⅡイクシル。鵜は問答無用といわんばかりに、その闇色の大鎌で斬りかかる。

「うわっ、うわっ、うわああああ」

「お師匠様の仇！ 仇！ 仇！」

でたらめに大鎌を振り回す鵜から、マジユヌーン・アルⅡイクシルは腰を抜かしながら逃げ回った。試験管やら、書物やら、とにかく手近にあるものを手当たり次第に鵜に向かって投げつけるが……でんで滅茶苦茶な方向へ飛んでいき、鵜が躲すまでもなく、当たらない。どうも、荒事に慣れている方ではないようだ。

しかし、それでも鵜は十二の女の子、いかに体格不良とはいえマジユヌーン・アルⅡイクシルは成人男性。徐々にだが、彼の方に余裕が出てきたようだ。彼は隙を見て、食卓を

持ち上げ……、  
ガツン。

その食卓を盾にした。

鶴の大鎌と食卓は正面衝突し、彼は無理矢理、鏝迫り合いに持ち込む。

よくよく考えれば、現在、鶴は《夔》を只の大鎌としか使っていない。鶴は超人的な巫術師であるから、巫術戦に持ち込めば、マジユヌーン・アルⅡイクシルを一蹴できるかもしれない。しかし、鶴は興奮しているせいか、思いつきり鎌を大降りしているだけなのだ。不意打ちとはいえ、そんな相手に互角とは、彼は体術に通じているわけではないようだ。意地の悪い見方をすれば、貧弱さと臆病さが前面に出ている。

「あの、マジユヌーンとは、偽名だったんですか？」とりあえず、状況が落ち着き始めたようなので、フウルウは問いかけた。

「違うって。僕は《愚か者》マジユヌーンなんだよ」と、彼は律儀に答える。「昔、奴隷だった頃そう呼ばれていてね。ある意味、僕の最初の名前だから、最近の主に使っているんだけど、何かあったの？ というかこの娘、誰？ なんか、阿翦の小さい頃に見た目がそっくりなんだけど……」

「いえ、なんとというか、私にもよく……」

『死ねええ！！』

鶴の言霊に反応した《夔》が黒い光を放ち、細かく震え始める。どんな仕掛けかはわからないが、今まで、『闇色の大鎌』と五分の状態で聞き合っていた木製の食卓はいきなりのこぎり鋸に切り取られるように、二つに分解されていく。

「うわわ、説明はいいから助けてえっ！ ピヤオ殿っ」

マジユヌーン・アルⅡイクシルはどうとう声を上げた。

さて、どうしたものか——と、フウルウは迷った。実を言うとフウルウはとつくとにフイチロウヤオ《虎体狼腰》を発現済み。目立たないようにとんとんと床を足で蹴って、効力も確認済みである（未調整による弊害で能力が不安定になっているのは変わらないが、どうやら、傀儡の力を使えないというわけではないらしい。再現性のない障害ゆえに『不安定』なのだろう）。今の化け物じみた脚力なら、致命的な事態になる前にすべてを収拾できる。二人の間に割り込んで、二人の——いや、鶴だけでも——体を抑え込めば済むのだ。しかし……、

「フウルウさん、手を出さないでください。この男はわたし自身の手で仕留めますっ！」

「うわっわわ、ピヤオ殿っ、た、たたたたた助けてーっ！ ここ、殺されるーっ！」

——そんなことを言われてもな……。

フウルウとすれば、どうしたものやらといった感じだ。状況すら、うまくつかめないのに、そんな重要な決断を迫られても困る。

「嫌だああああああっつつつつ！ 死にたくないよおおおつつつつ！」

………フウルウはその一言に妙な共感を覚えた。とりあえず、怪しい古典の引用で、アルⅡイクシルに助け舟を出すことにする。

「あのさ、鶴」興奮している鶴に後ろから控えめにフウルウは言った。「どうせなら、このまま殺すより、彼の重い罪をここでちゃんと論じて、己の罪深さをきちんとわからせてから、殺した方がいいんじゃないかな？」

どう考えても、詭弁でしかない一言だった。根が単純な鶴は一瞬、動きを止めて、「むむ」と考え込んだ。

当然ながら、そんなことを聞くはずもないアルⅡイクシル。その隙に食卓を放り投げて、腰を抜かしながら、逃げ出しにかかる。

「ああっ、まて、卑怯者！」

「どっちがだ！ こっちは素手だぞ」

アルⅡイクシルは目に付いたものを手当たり次第に鶴に投げつけ、逃げ出す。

鶴の方は、向かって来る投擲物を悉く《夔》で防御し、アルⅡイクシルを追う。

家の外へ駆け出してゆく二人を見ながら、やはり自分も追いかけてねばならないのだろう。など、フウルウは少しうんざりした。

\*\*\*

「ふふふ、ごほっごほっ、ふふふふ」

本人は不敵な笑みのつもりなのだろう。

だが、つい先程までの全力疾走のせいで、鶴は時々咳き込んでいた。

「さあ、もう逃げ場はありませんよ。ごほっ、あなたの後ろはゴミ捨て場。まあ、ゴミに、

ごほっごほっ、埋もれて死ぬというのは相応しい末路ではありますね」

鶴の息が乱れまくっているのであまり迫力がないが、確かにアルⅡイクシルの運命は絶望的だった。

彼の背後には刈り取った雑草、不要になった木材、野菜の不可食部分——要するに、ゴミが山になって詰まっていた。おそらく、後で燃やして堆肥にしようとしていたのだろう。

左右には延焼を防ぐための防火壁が築かれている。いずれも、よじ登って乗り越えられないこともない代物だろうが、その前に鶴の大鎌は彼の命を刈り取るだろう。

「死んでたまるかっ！」

最後の抵抗とばかりに、アルⅡイクシルはゴミとして棄ててあつた藁の葉を鶴に投げつけた。ただの葉とはいえ、その羽状複葉は、長さニクーデ（約一・五メートル）に達する。

いきなり投げつけられ、顔にでも当たれば、少女をひるませるには十分だ。しかし、

「『……風の裏うちの鼻はな、星の裏うらの夕風、万成よろずすもの、いと小さきものよ。我が希こいねがい故に、我が身に集え。我が望み故に、我が肌を鎧え。我に近寄る卑しき奴の道を阻め……

《希望故に道あり》』

突如、巻き起こった乱気流が、鶴に向かう藁の葉をあらぬ軌道へとそらす。本来、大気中の精霊に干渉し、一瞬の突風を巻き起こす特殊巫術だ。鶴はその突風を発生させる前段階の気圧の歪みを恒常的に自身に纏わりつかせ、空気の盾としたのだろう。

「ふふ、あなたが作詞し、得意だった巫術の改変版です。本当は口ずさむのも汚らわしいのですが、まあ、これであなただを殺す下ごしらえすると思えば、これもまた一興ですね」

「畜生っ、畜生っ！」

人間、そう簡単に死を受け入れられるはずもない。手当たり次第に、茄子の茎やら、西瓜の皮を投げつけるアルⅡイクシル。だが、その生ゴミ投擲攻撃の悉くは鶴がまとう風の衣に弾かれる。《夔》による能動防御すら、今の鶴には必要ない。

「あはは、無駄ですよ。わたしは干渉力に不足していませんからね。あなたのように小細工を練る必要もないのです」

鶴の冷笑をよそにひたすらアルルクシルはゴミを投げつけた。角材のように重いものはさすがに風の壁だけでは防ぎきれない。だが、風の壁を突破するのにその運動量の多くを失った投擲物など、十二の少女にでもほとんど見切れる。わずかな例外は《夔》で防げる。

「ククク、惨めですね」

鶴に対してまったく効果のないアルルクシルのその行為は、まるでただひたすらにゴミ漁りをしているようにも見える。

「しかし、どのように殺してあげましょうか？ ふふふ、やはり、《十絶陣》にしましょう。シースエシエン

この日のために半年かけて編み出した複合型痛覚刺激用の巫術です。《夔》を寄生させ、神経系を鋭敏にした上で、痛覚を刺激する。楽に死なせはしないわ！」

そう鶴が狂喜の笑みで言い放つと同時に、

「それはまた……」

と、アルルクシルがいきなり前に飛び出して、少女に襲い掛かった。

「……非建設的だねっ！」

アルルクシルの右手には何か棒状のものが握られていた。最初は木の枝か何かに見える。が、よく見るとそれはれっきとした《杖》だった。もつとも、木の枝に見えたのも誤りとは言い切れない。その《杖》を一言で形容するなら

——長さ四クーデ（約二メートル）を超える藜あかさの茎を加工した杖

だったからである。藜自体は、フウルウも故郷では身近に生えていたが、しかし、藜は長くても三クーデ（約一・五メートル）程までしか成長しないはずだ。少なくともフウルウは己の身の丈よりも大きな藜など見たことがない。亜種の類？ いや、そもそも藜はアツザフル帝国には生えていない。ならば、藜を模した結晶細胞の類かもしれない。

いや、そんなことはどうでもいい。

アルルクシルはその杖を斜め上から少女に振り下ろしたのである。いかにアルルクシルが瘦身に脆弱といえども、長さ四クーデ（約二メートル）もある棒状の物体で、ぶん殴られれば……。

実際間一髪だった。結果的に何とかなったとはいえ、フウルウが飛び出なかったのは、あまり正しい判断とは言えなかっただろう。

突然の急襲に鶴は動けなかったが、《夔》は自律反応してくれた。その形状を変化させ、鶴を守る。一瞬、目を瞑ってしまった鶴であったが、すぐさま大鎌を構え直し、その杖を受け止める。そして……、

「『無駄です！』」

再び、鶴の言霊に反応して、大鎌の形状のまま、《夔》は黒い光を放ちながら、細かく震え始める。光も震えも先程より強く激しい。また、先の食卓と違い、《杖》は厚みがない。そもそも、藜は（あれが藜という仮定だが）木ではなく草だ。軽いが、脆いのだ。故に瞬く間に切断される——かと思いきや……、

カツンと硬い音が響く。大鎌と杖の接触の結果はそれのみだった。

「この杖の銘は《カムヌ》！ ああ、蒼き靈剣《ナーガ》の……まあ、同胞はらからのようなもので

ね！」アルルクシルは焦燥の中に余裕を見せる。「その程度で斬り落とされはしないっ」

「戯言をつ！」目茶苦茶に大鎌で切りかかる鶴。だが……、

カツン！ カツン！ カツン！

彼の言葉を証明するかのように《杖》は《夔》の刃を正面から受け止める。

衝突する瞬間をフウルウの傀儡としての超人的視覚で注目すると、確かに《夔》の刃は《杖》にある程度まで食い込んでいる。しかし、そのある程度で止まってしまふ。包丁をまな板に叩きつけても、まな板が割れることがないのと同じだ。おまけにわずかにつけられた《杖》の傷も、しばらくすると再生している。

質感や、再生現象、何よりアルルクシルに反応して淡く輝いているところを見ると、やはり、あの《杖》は藜そのものではなく、藜に似た精霊結晶なのだろうか？

「おのれ」鶴も同じ驚愕を覚えたのだろう。「こんなものを隠しているとは」

——というか、棄ててあったように見えるが……。

フウルウは疑念を抱いた。

とはいえ、こうなると互いに決定打を欠く。《希望故に道あり》も、中距離以上でな

ベニエニニアバナシヅア

ベニエニニアバナシヅア

れば、効果が薄い。そして、その弱点は発現条件を考慮すると《希望故に道あり》に限らず、多くの巫術に言えることだ。しかし、常識外れの巫術師たる鶴なら、例外を隠しているようなものだ。が……、

「このっ！ このっ！ このっ！」

「むっ、くっ、あっ、きや、きやあ」

……と言うのが実情だった。《杖》も《夔》も、双方共にただの杖と大鎌としての効力しか發揮していない。そのためこの勝負は純粹な白兵戦となる。

鶴は特に体術を修めているわけではない。アルルクシルも似たようなものだ。となると、体格差で一応は後者に分が出てくる。

何合か打ち合った後に……、

「きやあっ」

という、叫び声と共に鶴の手から《夔》が弾き飛ばされた。すぐに《夔》に手を伸ばす鶴だが、アルルクシルが先んじて杖を少女の喉元に突きつけ、それを制す。これでは巫術で《夔》を呼び寄せることもできない。

「ふん、侮ったな。史上最弱とはいえ、僕も精霊に魅入られた者の一人だぞ」

いや、あまり関係ないのでは——フウルウは思ったが、アルルクシルがなにやら浸っているようだったので、あえて、口に出すことはなかった。

「しかし、いきなり斬りかかって来るなんて、酷いじゃないか。君は僕に何の恨みがあるんだ？ というか、君、誰？」

打って変わって、至極もつともなことを言うアルルクシル。対する鶴は彼をキッと睨み付ける。

「わたしの名は鶴ぬえ！ 鵬雛子ほうすうしが一番弟子よ！」

「弟子？ 君が？ あの子供嫌いの阿翦が？」

態度からして、本心からのものと思われるその言葉は明らかに鶴の逆鱗に触れた。

「お師匠様が子供嫌い？ はっ、誰からも必要とされなかつた男が何を言うか！」

「それは違うな。僕は僕に必要とされていたぞ」

あっさり答えたアル・イクシルに鶴は少しばかりひるんだが、  
「そ、それを詭弁というのよ！」

と、すぐにやり返す。とはいえ、力でも、言葉でも——あるいは人間としての器でも——負けた鶴は明らかに悔しがっている。だが、このまま引き下がるわけにもいかず、再び鶴は噛み付く。

「そもそもっ、阿翦、阿翦と軽々しくお師匠様の御名をっ……」

今度はアル・イクシルが女媧娘々の本名を連呼することに突っかかる。しかし、それは苦し紛れの八つ当たりだった。確かに《夏の国》では、成人の本名の呼称を許されるのはその親近者だけで、第三者は字を呼ぶのが礼儀とされている。鶴が不快に感じるのも無理はない。だが、それはあくまでも形式上のことだ。本人に面と向かってでなければ、咎められることは少ないし、その《夏の国》の習慣をアツザフルにまで持ち込むこともなからう。まして、史書やこの二人の証言を鑑みると、仲は悪かったもののアル・イクシル・ディアウスと女媧娘々（鵬翦）は赤の他人とは呼べない関係だった筈だ。

しかし、フウルウは注意しなかった。この際、アル・イクシルに鶴の毒を吐きださせた方がいい。鶴のことをしばらく任せてもいい。フウルウは彼を本格的に信頼し始めていた。

「しかし、あいつだって、僕の事を呼び捨てにしていたぞ」

期待に応え、受け流す器量を見せるアル・イクシルにフウルウは笑みを零した。

『「あいつ」ですって？ 汚らわしい！」

「あいつは僕のような愚か者に何か言われて気にするような女ではないよ」

「あ、あなたがお師匠様の何を知っているっていうんですかっ」

「唇の味」

……それはまずいだろう！

やはり、任せるべきではなかった。フウルウが慌てて仲裁に入ろうとする。

しかし、明らかに手遅れだった。

「……っ！」

鶴の背まなじりが爆ぜんばかりに裂ける。

「つつつつああああああああああああああああああっつ！！！！！！」

少女は絶叫を纏う。圧倒的な精霊の乱流が巻き起こる。死神の大鎌は瞬く間にその形を崩し、醜い肉塊となって、黒衣の少女が天にかざした細い手元へと駆け寄る。

「鶴っ、やめろっ！」

「轉まをするなっ！ 傀儡まをす如きがっ」

思わず止めにかかるフウルウだが、鶴の一喝で途端に体が動かなくなる。

——くっ、運動神経の大半を遮断されたっ？

鶴の手元に集まった《夔》は最早、ただの黒く蠢く闇の塊になっていた。

「お師匠様の純潔の代償っ、今ここで！」

「断っておくが、僕は別に……と、無駄か」

ただ、ひたむきに言霊を紡ぐ鶴にアル・イクシルの言葉が届くはずもない。

『……絶えざる痛み。終わらざる苦しみ。これすなわち、天絶、地裂、風吼、寒氷、金光、

化血、烈焰、落魂、紅水、紅砂。東夷と見下され、妖あやかしと蔑まれ、殺劫のままに封じられし、一聖九君。ここに束ねるは蓬萊の力、今より始まるは指数の天刑！ 《十絶陣》シーステン！」  
 言霊を解き放つと《夔》を振り下ろすと、先端がいくつにも別れ黒い肉の触手が伸びる。それはあたかも黒蛇が群れの如く、次々とアル||イクシルの方へ向かった。  
 しかし、異常な事態にもかかわらず、アル||イクシルは慌てず急がず、その《杖》をかざして、祝詞を唱える。

「『……万象を運びしもの、風を孕みし藜杖よ。虚ろ夜の御魂、空の定めを乱せし星、我の前に示せ。祭壇を背に託宣の下に、我、ここに命題を果たす……《杖》カムヌ』」  
 言霊と共に、六対の純白の後光が突如アル||イクシルの姿を包む形で発現する。刹那の後、彼を中心とした烈風が吹き荒れ、彼が手足に巻いていたさらしが吹き飛んでいく。

そして、鶴の《黒》がアル||イクシルの《白》に激突した！  
 その結果は……。

「悪いがね。この手の防壁はキュンティアの専売特許というわけではない」  
 アル||イクシルの余裕は虚勢ではなかった。その後光は雛を守る親鳥の翼の如き壁を成し、闇の触手がアル||イクシルに近寄るのを完全に阻みきっている。

「……なっ！」  
 ——馬鹿なっ！

表情から察するに鶴も襲われているであろう驚愕は、アル||イクシルが展開した白光の防壁についてではない。この大地では精霊を司る強い力、莫大な干渉力は全能ではないにせよ、万能ではある。鶴を見ればわかるが、干渉力さえあれば、多少の無理は利くのだ。  
 ……干渉力さえあれば。

この際、アル||イクシルの展開した防壁の正体はどうでもいい。《十絶陣》シーステンは見た目が派手だが、所詮は苦痛を与えるのが目的の巫術である。その攻撃力自体はたいしたことはない。精霊が作用している。それで十分だ。具体的なその過程はわからないが、納得のいく仮説はいくらでも思いつく。干渉力があれば。

そう——アル||イクシルにはその肝心の干渉力がないはずだったのだ。いや、あるにはあるのだが、先天的干渉力欠落症とすら思わせる程に貧弱な干渉力しかない。

だが、その貧弱な干渉力が、いきなり……膨れ上がった。

間違いない。彼が《杖》をかざし、あの祝詞を唱え終えると同時に、アル||イクシルの貧弱だった干渉力がいきなり膨れ上がった。そして、アル||イクシルはその増殖した干渉力を以って、あの光の壁を作り出したのだ。

しかし、どんな巫術も精霊を効率よく使役する技術に過ぎない。干渉力そのものを増やす巫術など……、

——いや……ある。

天啓の如く、フウルウには閃くものがあつた。

鶴の力だ。《神憑り》だ。

あの莫大な干渉力のからくりと同じだ。《外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性干渉法》だ。アル||イクシルが干渉した精霊に擬似人格を形成させ、その人格を持った精霊に精霊を使役させ、さらにその精霊に同じように精霊を使役させ、さらに精霊に使役させる。その繰り返しだ。

よく観察すると、アル||イクシル自身が莫大な干涉紋をまとってはいないのである。その周りにある精霊そのもの、そして、なによりあの《杖》が莫大な干涉紋を纏い、その力でさらに数多くの精霊を支配しているのだ。

——アル||イクシルにとつてあの《杖》は、鶴にとつての《夔》なのか……それにしてもゴミ捨て場に捨ててあったが……いや、逆か？ あの《杖》を雛形として、女媧娘々は《夔》を作った？ しかし、ではあの《杖》とその同胞とは一体？

いずれにせよ、鶴はとんでもない代物（あえて、アル||イクシルとは言うまい）を敵に回している。

「さて、次はどうする？ 鶴姫命、仮初めにも阿翦の一番弟子を名乗るなら、これで終わりではあるまい」

さらにアル||イクシルは、《十絶陣》で無駄な攻撃を続ける鶴を挑発した。

しかし、フウルウにはちよつとわからない。同じように干涉力を増殖させる手段を持っている二人だが、《夔》なしでもそここの干涉力を誇る鶴と、《杖》なしでは極めて小さい干涉力のアル||イクシル——素の力が小さい分、アル||イクシルの方が不利なのではないだろうか？ その余裕の正体は何なのだろうか？

しかし、フウルウの数々の疑問を押しつけ、鶴は《十絶陣》を解除し、《夔》を大鎌の形状に戻す。

——挑発に乗ったのか？ いや、違う……？

しばらくの間、大鎌を手にしたまま、黒衣の少女は一人押し黙っていた。

かと、思うと顔を下に向けて、ぶつぶつと語り出した。

「傲慢を司る悪魔にして、原罪の墮天使。太古には光り輝く十二枚の翼を背に、絶対者の側に在ったもの。上古には弥初人に智慧という名の禁じられた果実を齎し、それ故に超越者に放逐されたもの。かつては天にあり、今は地に落ち、それでもなお、高みを目指すもの。自らを生け贄として、人に真の光を捧げようとするもの。——言わば、真理を探究せるものたち、全ての始祖」

その語る声音はたしかに鶴のものであったが、妙に透徹としていた。まるで、この少女ならざる者の魂が鶴を憑坐として宿ったかの如く。

「ギリシャ神話におけるプロメテウス、エノク文書におけるアザゼル。アステカにおけるケツアルコアトルやシーナ||スターナにおける蚩尤。あるいはワーク||ワークにおける八岐大蛇なども含まれるかもしれない。そして、世界宗教となったアブラハム系一神教群においては……ふっ、固有名詞に拘るのは愚かかしら？」

いずれにせよ、フウルウには少女の言葉の多くは理解できなかつた。

——あるいはこれも女媧娘々が与えた知識なのか？  
そして、顔を上げ、彼女はせせら笑った。

「インドにおける《覚醒者》——認識主義の語る《悪しき創造主》に抗い、智慧の光による人類の覚醒を促すもの——それはあらゆる文化圏の人類意識の底に等しく眠っている。故に、その呼び名は数え切れないものね」

アル||イクシルは何も言わない。光をその身に帯びたまま《白衣の賢者》は《黒衣の魔女》の言葉を受け止めていた。

「でも、人類発祥の大地——すなわちアフリカ大陸ロジ族において、その名は『カムヌ』。

創造主の模倣者にして駆逐者、その杖の銘と同じ名を持つ者——すなわち、最初の人間『カムヌ』

「……そうだ。宿に抗い、業に逆らう力の源さ。さあ、君は何を望む？」

「死になさいっ！」突然、鶴は裂帛の気迫を取り戻す。「細胞一つ残さずに！」

「……おやおや、楽に死なせないんじゃないのか？」

静かに指摘するアル・イクシル。対する鶴は憎悪に爆ぜた激情の中に、一抹の冷酷な笑みを浮かべた。左手で自ら闇色の髪を束ねる飾り布を解く。その髪は丹念に梳った月日を湛え、鶴の瞋恚を写し出す精霊の流れに乗って、少女の紡ぐ言霊と共に、何もない空間をさらさらとたゆとうた。

「……棺よ。蛇よ、火よ、雨よ、月よ、翼よ。風よ、雲よ、水よ、闇よ、鏡よ、海よ、鳥よ、土よ、瞳よ、雪よ、影よ、山よ……」

少女の髪の美しさにフウルウが魅入っていると、今度はその髪が急激に伸びていることに気付いた。最初は錯覚だと思った。精霊の急激な活動が起こした小さな乱流に踊らされる髪を見誤っているだけかと考えた。だが——違う。それは確実に伸びていた。その上、その精霊の生み出す風も鶴に向かって一斉に流れ込んでいる。

「……生きとし生けるもの、死して死せるもの、あめつちしろ天地統しめすなにも汝妹の命よ……」

髪が急に伸びる筈がない。よしんばそれが巫術によって可能だとしても意味がない。もしや、精霊を結晶化して、自分の髪に継ぎ足しているのか？ 鶴が髪を解いたのは戦に臨む際の習慣ではなく、大気中の精霊との接触面積を増やし、その作業の効率を加速度的に上昇させるためなのか？

ふと思い立ち、フウルウは己の身体に目を向けた。

淡く輝いている。

特に、鶴によって、精霊（結晶）と入れ替えられた部位が特に強く輝いていた。

慌ててフウルウはアル・イクシルの小屋へも目を向ける。やはり、窓の中から淡い光が漏れている。あの中には精霊結晶がごろごろしていた。

鶴に反応しているのは間違いないが、この現象は異常である。もしや、結晶から少しずつ精霊が剥離している？ なら、鶴は周囲の——大気中に浮遊しているものだけではなく、既に固着しているものも、土や草木に寄生しているものも、あるいは、フウルウ自身に宿っているものまで……ありとあらゆる精霊をそれこそ無理矢理かき集めていることになる。

「……仮初なれど、一夜なれど、ここに交わりて、泡沫の契りを結ばん。《カミオロシ神降ろし》」

鶴の頬に黒い光の筋が浮かび上がる。フウルウの目には古の紋様に見える。呪飾という言葉も思い出せた。それは後世に発明される電子回路に見た目も役割も酷似していた。法衣に覆われているのでわかり難いが、おそらく、その黒い光は少女の全身に蠢いているに違いない。元々の黒づくめの衣装、そして既に少女の身長を越える長さにまで伸びた異常な髪と相成って、文字通り黒い闇に鶴が囚われていた。

そして、鶴の干渉力も跳ね上がる。

あの『闇色の大鎌』もビクンビクンと脈動を激しくする。その異形の眼球が赤い輝きを強め——いや明らかに赤い光を放ち始める。

間を置かずに鶴はその跳ね上がった干渉力を以って、言語巫術の準備にかかる。

——ちよっと、待て！ そんな量の精霊を一度に使役する巫術なんて……！

しかし、フウルウの口から声は出ない。鶴の言霊は止まらない。しかも、何故か、アル  
Ⅱイクシルはまったく祝詞を唱えようとせず、ひたすらに鶴を見つめている。そして、  
「**神化粧**……やはり、**神憑り**か」

アルⅡイクシルは何かを確信したらしい。呼び方はともかく、フウルウもその意味はわ  
かった。アルⅡイクシルと異なり、恒常的に《**夔**》による《外部情報処理器官との情報共  
有による連結性精霊干渉法》を使っている鶴だが、だからといって、常に全力を出してい  
るわけではない。そして、今、その力のすべてを解き放ったということだ。

あえて、アルⅡイクシルが鶴を挑発したのは、フウルウと違い事前に《**夔**》のことを聞  
いていなかったために、確実を期しなかったのだろう。そして、その結果、フウルウと同  
じ結論へ至ったということだ。しかし、そんなに呑気に構えていて、いいのだろうか？ 鶴  
の方の巫術はもうすぐ発現するというのに、アルⅡイクシルは祝詞も唱えずにいる。

あの白い光を先程からずっと維持し続けているが、逆にそれを攻撃に使う気配もない。  
いや、わざわざ巫術で対抗しなくても、詠唱中に先手を打つこともできるはずなのに、何  
かぶつぶつ言っているだけだ。

しかし、鶴は一切躊躇わずに言霊を紡ぎ続ける。それはまったく聞いたことのない祝詞  
だった。鶴がよく使い、フウルウもよく知る《**夏の国**》のものではない。

先程の《**神降ろし**》もそうだったが、**歯茎側音**や**歯茎ふるえ音**が少なく、**音節数**がやた  
らと多い。その代わりに、**音韻法**則は単純で、**母音**と**子音**がほぼ完全に一対な**開音節構造**  
——いや、これは**母音調和**か？ いずれにせよ、この（**推定**）**膠着語**は、おそらく《**根の  
国**》のものだ。フウルウの知識もほとんど及ばない。どういう原理が働いているのかもよ  
くわからない。

しかし、かき集めた精霊が悉く黒い瘴気と化し、少女の周りを蠢き回り、纏わり付いて  
いる。あの『**闇色の大鎌**』ですら、その瘴気に鶴の意思を染み渡らせるための**道標**としか  
働いていない。なにより、投げ入れている**精霊量**、用いている**干渉力**だけで、その威力は  
想像がつく。

そして、鶴は両手で《**夔**》を斜め上に構える。大鎌の先端に、瘴気が集約され、ヒトの  
頭ほどの暗黒球が形を成した。一歩間違えば、確実に大惨事を起こすであろうそれを少女  
は全身全霊をこめて制御している。己の瞳にも似た色の小さな太陽を維持するために、鶴  
は黒髪と黒衣の精霊すべてをつぎ込んでいた。

それを評して、アルⅡイクシルは語る。

「……髪は地に伸び、三つ目の足の如く、衣は天に向かい、八重に別れ、八咫に広がる。  
その姿は、黒い鳳凰、あるいは大鴉か、いずれにせよ、翼あるものの有り様」

「黙りなさい……！」さすがの鶴も、額に汗を流したまま、怒鳴った。「どうして対策をと  
らないのっ？」

「その麗しい姿に見とれていたから……ではおかしいかね？ 褒められたことではないが、  
背徳的な快感というものはあるんだよ」

「予め言うておくわ。この巫術はわたしの使えるものの中では、最高の攻撃力を誇る！」  
「わかるよ。その黒い光は炎色反応によるものではなく**黒体放射**によるものだろう？ あ  
あ、無論、その厳密な数学的説明なんて、僕には無理だ。が、**鉄球**や**電離気体**を加熱した  
際に放出される光の**波長分布**の偏りとしては理解できる。赤で三千度、黄で六千度、白で

九千度、青で二万度、紫で四万度……心理的錯覚はあるにせよ、黒く見せる程の熱量は尋常ではない。……とはいえ、一個人を抹殺するのにそこまでの高温は無用に思えるがね？」

「あなたを完全に灰燼と帰すためには、これぐらいは必要よ」

「では、こちらも予め言うっておこう。無理だし、無駄だし、無意味だ。事象の決定権は君にはない」

「じゃあ、誰にあるって言うのよ？」

「決まっているだろう、僕だよ、僕。決めるのは僕。この世界は僕のためにあるんだからさ」

「そんなもの認めてたまるかっ！」

「狭量だな。僕は愚者であつても奴隷ではない。この人生の主人公は、陳腐だが、やはり、僕なんだ。その物語の末路ぐらい僕に決めさせてくれよ」

フウルウにもはつきりと伝わってくる憎悪の念——鶴は最早付き合わない。容赦なく、残りの祝詞を紡ぎ出す。

『……黄昏は幽世との邂逅、貫かれし輝きの陰、汚され翳られ辱められし日の光よ。我、

ここに忌み詩を口ずさみ、現世ことごとを灰神楽と成さん！』

そして、少女は大鎌の一振りと共に、黒球を放り投げる。

必滅の闇がまっすぐにアルイクシルへと飛んでいく。

よほど自身の眼前に展開している防壁に自信があるのか——やはり、一步も動かないアルイクシル。

当然の如く、白い光に黒い闇が接触する。先程と同じく、《白》に阻まれる《黒》。

しかし、鶴は狂った笑みで言霊を解き放った。

『《緩慢なる皆既食》！』

その真なる発現を完遂する巫術は、その闇の半径を一気に拡大させた。

これまでではせいぜいがヒトの頭部ほどだった黒球が、突如として、ヒトの全身ほどの大きさに膨れ上がった。当然、アルイクシルは展開していた防壁ごと、その全身を黒球の内側に閉じ込められることになる。

驚くべきことに、それでも六対の白い光は、輝きを保っていた。フウルウの強化された

聴覚には「……凄いな。形態はキュンティアの………と………の《焰の身滌ぎ》の

中間……祝融殿の《鐘山燭陰》……比肩しうる熱……じ……ないか………。」という

呟きが届いてくる。

しかし、それが消え去るのも時間の問題に思えた。

薄い霧が幾重にも重なって、目の前が見えなくなるように、どんどん濃くなっていく暗黒は、アルイクシルの姿もあの白い六対の光も、覆い隠してゆく。雲が日を遮るかの如く。夜が昼を閉ざすかの如く。岩戸が天照らす女神を隠すかの如く。

とうとう、フウルウの耳にもアルイクシルの声は聞こえなくなった。

鶴は息を切らせながら、忌々しげに「ふん」と吐き棄てた。

徐々に球体を形成してゆくその暗黒の向こう側は見えなくなる。だが、意外にも、その巫術による余波はほとんどない（あれば、身動きの取れないフウルウはとっくに消し飛んでいるだろう）。それだけに、その力が集中しているのかがわかる。

最後に残ったのは人間一人を軽々と包み込むほどの大きさの、しかし、ただひたすらに

黒い太陽が一つだけ。それも、徐々に薄くなっていく。

「……これでっ」

さすがに集中力が切れたのか、鶴は大鎌を支えに膝を着いた。髪はそのままだったが、アルⅡイクシルが**神化粧**<sup>カムメカシ</sup>と呼んだ黒い幾何学的模様も消えている。

——……殺してしまったか……。これでは文字通り細胞一つ残らん。

フウルウは暗鬱たる気分になった。これは望むものとは大きく離れた結末だ。

しかし、その気分はすぐに戦慄へと変わる。次に響いたのは鶴の絶望の声だったのだ。

「そんな……っ」

なんと、黒い太陽が晴れた跡にあったのは、相も変わらず、平然と杖を掲げた一人の探究士の姿と——やはり、その前を覆う六対の白い光の壁。

いや、唯一、相違点を挙げれば、彼の肌には鶴と同じ——だが、鶴と違いその色はひたすらに白い——**神化粧**<sup>カムメカシ</sup>があった。

「無傷？ どうしてっ、だって精霊は……」

フウルウもまったく同感だった。干渉力こそ莫大なままだが、アルⅡイクシルに精霊を使役した気配はない。仮にこっそり使役したとしても、その量は鶴に比べれば、微々たるものである筈だ。

「……これが**魔術**<sup>マジックアーツ</sup>？……」フウルウはようやく口を開けた。「この世のものならざる力……」

**超越**<sup>アルⅡムクアール</sup>——そんな言葉が脳裏に浮かんだのは鶴も同じだった筈だ。

巫術はあくまでもこの世の理の中で働く。精霊が大気中の水蒸気を集め、水を生み出すことはある。精霊が可燃性気体を造り、炎を燃やすこともある。だが、精霊が無から有を創り出すことはない。

しかし、明らかにこの力は——世界を律している筈のありとあらゆる法則を無視している。

「……造化の……この宇宙の初期条件決定者の……御業？」

「介入者というべきだろうね。僕はこの宇宙の歴史を書き綴っているわけではなく、その一部を書き換えているに過ぎないんだから」

アルⅡイクシルが言葉を補うと、六対の光の壁はひゅんと音を立てる。すると、その白い光は一瞬にしてその翼身の大半をアルⅡイクシルの前面から、後方へと移動させた。フウルウにはその白い光の正体がさっぱりわからない。

先ほど鶴の使った黒い光は、アルⅡイクシルも語った通り、化学反応で作りに出した高温電離気体だろう。それを精霊に作らせた力場（磁場？）で包みこんだシロモノ（を極限まで圧縮した超高温超高密度な何らかの特異点？）である。いずれにせよ、仮説は幾らでも提示できる。

しかし、あの六対の白い光はそんなものではない。まるで理解が及ばない。

一つだけはっきりしているのは、そのアルⅡイクシルの姿が、その背に六対の光の衣……あるいは六対の光の翼をはためかせているように見えるということだ。

それは三十二相八十種好の一つ、丈光相を造形化した円光——鶴の語る**《覚醒者》**<sup>ブツクダ</sup>が背負う後光にも思える。

……歴史上、この様な記録は少ないが、ないこともない。建国の四聖や流浪の四仙など

の記録などがそれに当たる。

いや、そもそも、大規模巫術によって引き出される抽質エネルギーの総量が、一定空間の精霊が持つ化学エネルギーの総量を稀に上回るとは、アツザフル暦十年に行われたイブンⅡダーウードの実験で証明されている。実際、鶴が今使った《緩慢なる皆既食》も純粹な化学エネルギーの発露としては強力すぎる。実験に立ち合った探究士たちは精霊のネットワークは情報だけでなく、エネルギーもやりとりされている可能性を示唆したというが……。

——さて、どうする？

正直、こんな手も足も出ないに決まっている。しかし、それでも、フウルウは『次の一手』を考えなければいけない。

すると……。

「それよりも、ピヤオ殿、身体は大丈夫？」アルⅡイクシルは慈しみの目をフウルウに向けた。「さつきから、妙にじつとしてるんだけど……」

「あ、ああ」手足を動かすフウルウ。どうやら、鶴からの静止命令が解除されつつあるらしい。「大丈夫です」

その時、ドサツという軽い音がした。

鶴が膝をついていた。

呆然としたまま、彼女は呟いた。「……わたしの力では及ばないって言うの」

「そうではないよ。鶴姫命」こちらには哀れみの目を以って、アルⅡイクシルは語る。「向いている方向が違うというだけの話だ。君は燃え盛る火の車を前にして、桶で汲んだ水をかけて火を消そうとしている。僕は燃え盛る火の車を前にして、己の目を閉じることで火を消そうとしている。前者は火の勢いよりもかける水が勝っていなければ、火を消すことはできないが、後者はその限りではないということだ」

「欺瞞だわ」

「僕もそう思う。目を閉じれば、火は消えるなんて、欺瞞もいいところだ。これが真実なら、貧しき者は幸いだよ。祈るだけで神の国に行けるのなら、これ程、安っぽいものはない。出来るなら、自らの足で立ち上がり、己の手で望むものを掴むべきだ。——出来るものなら……」

「……やってみるといわけかしら？」

「違う。出来るものなら、そんな風に生きてみたいんだよ。僕だって、誰だって。君の師母たる彼女のように。でも、天運とか境遇とか、あるいは才覚とか——そういう者に欠けた者がこの世界には満ち溢れている。水を汲んで火を消せるのは、伸ばせる手があつて、踏みしめる足があるものだけだ。何もかもが足りない者の一途で真摯な祈りすらも許されないというのか？」

「手足がそろっている上に、背中に十二枚も羽を生やしている男の台詞じゃないでしょーが！」

「語るに落ちたな」アルⅡイクシルはその《杖》で己の背中を指した。「では、僕はこの光の翼故に、僕なのか？ 違う。僕は僕だ。この神の力は所詮力でしかない。そんなもので、僕という存在が左右されてたまるか。僕がこうやって偉そうに話せるのは背中に羽を生やしているからなのか？ もし、この手に力が宿らなかつたら、僕は這い蹲ることを甘んじ

て受け入れなければいけないのか？ ……嫌だね。そんなのは真っ平ごめんだ。自分に都合の悪い世界は拒絶する——その意思こそが誇りであり、祈りなんだ」

「祈る前に足掻きなさいよ。いいえ、あなたのその光は、その足掻きの結果でしょう？ 自身への絶望と他者からの失望の中、ただひたすらに抗あらがい続けてきた証でしよう？」

「では、志半ばで散っていった者は、足掻きと抗あらがいを怠ったのか？ 違う。断じて、違う。彼らはただ力及ばなかっただけだ。しかし、無力と不幸に打ちのめされていて、人を見ることができない。顔を上げて空を見上げることはできる」

「それが祈りだと？ それが誇りだと？ 実に下らないわ。行動を伴わず、結果も齎さない意思なんて、無意味よ。無価値よ」

「平行線か——彼女とまるで同じだな」アルルイクシルの声に苛立ちが混ざった。「いいか、僕はな、老いや病で死にかけている者の手を握ることには意味はあるといっているんだ。それでその者の命が救えなかったとしても、死にゆく者にかけるられるたった一言で救われることもあると言っているんだ。君はそれが無意味だと？ 無価値だと？」

その一言で、何かが暗転した。

傀儡は、事ここに至っても、まだ忠実かつ冷徹に魔女に尽くそうと機能していた。だが、その一言で頭脳は静止し……、

「ええ、そうよ」何故か、鶴は涙を浮かべて断じた。「無意味よ。無価値よ」

……フウルウの精神に亀裂が走った。

——鶴……それ……。

「……それ、本気で言っているのか？」

アルルイクシルはフウルウの心中を代弁した。

そして、冷たい声で「だったら、証明してみる」と彼は呟く。

「今度は時間遡行での詠唱はしない。貴様にも認識できるよう時間軸の流れに沿って、馬鹿正直に言霊を紡いでやる。祝詞からこちらの手を読んで、足掻き抗ってみる。少なくとも、彼女にはそれが出来た——いくぞ」

はっと鶴は再び《夔》を振り上げる。

しかし、構わず躊躇わず、彼は鼻音から始まるその祝詞を歌い上げる。

「『……混沌はさまの狭間はさまより出でよ。濁業に御手濡らせし乙女。魂魄はたかいの端境はたかいへ還れ、刻印戴きし齊天なる女神……』」

それは、アツザフル語の単語と南方沿岸諸語の文法を織り交ぜたものだった。

あの《希望故に道あり》と同じ系統の言語巫術——アルルイクシルの言葉通り、その韻律は先程の彼のものとは違い、はつきりと外部にも認識できるものだった。

一方の鶴は大鎌を振り上げたまま、無茶苦茶な絶叫と共に駆け出す。

もう、まともに言語巫術を使う力も残っていないらしい。鶴はその大鎌で何度も何度もアルルイクシルに切りかかる。

だが、アルルイクシルの前には、件の白い光がある。その細腕が何度刃を振り下ろそうとも、完全に阻まれ、弾かれる。光の隙間を狙っても、そこにも見えない壁があるかのように、その翼の向こう側への一切の介入が拒まれる。

「何ですよ！ 何で届かないのよ！」

悔しさのままに叫ぶ鶴——実際、それは圧倒的な断絶だった。

まるで、世界の中に仕切りが作られ、二つに分け隔たれたかのようだ。全くもって、原理不明な《光》に『こちら側』から『向こう側』への干渉が否定される。この宇宙というシステムに『光の壁は越えられない』という新しい法則が書き加えられたかのようだ。

勿論、それも絶対ではないのだろう。もし本当にあらゆる情報の流れが遮断されているのなら、当然、光や音も遮断され、アルⅡイクシルには『こちら側』にいる二人の姿は見えず、声も聞こえずということになるからだ。アルⅡイクシルの『彼女にはそれができた』という言葉は、鶴の師母たる女媧娘々がかつてその辺りの矛盾を突いた可能性を示唆している。

しかし、そのことに鶴が気付いているか否かは怪しく、気付いていたとしても今の鶴にそのわずかな隙を付く力はなく——。

何より、すぐに発現を始める賢者の力がそれを許さない。

「……其は宿にして、業。其は律にして、法。我、いやはつ 弥初かむおの神追ひとい人——彼の名を以って、御柱に記す。万象の必然、なにも 汝妹が下腹に胎まさんことを……」

アルⅡイクシルが杖で図形を描くと、鶴の周囲に細い光の線が走った。

戸惑う鶴。その時、アルⅡイクシルが小声で「そのまま、動くなよ。設定領域に触れると厄介だ」と囁く。

鶴が「え？」と聞き返した瞬間に、アルⅡイクシルは言霊を結んだ。

『其は死を紡ぐ歌姫。《ハクテリジャンボリソクラリアンウイソ 終焉なき事象なし》』

発現と共に、烈風と寒気がフウルウと鶴を襲った。

——大気干渉系の巫術か？

フウルウは思わず眼を閉じたために誤解をしたが、すぐに考え違いを思い知らされた。

眼を開くと鶴の身体がカタカタと震えていた。

少女の周囲の大地にぼっかりと穴が開いていたのだ。

鶴を中心にした真円形の穴が、まるで、製図したかのように正確に出現していたのだ。フウルウは唾を飲み込んだ。

——今のは『一瞬』とかそういう問題ではないぞ。事象の変化における過程がない。発現前と発現後にあるべき連続性がない。ただ純粹なる結果だけが『顕現』した。

半径は二クーデ（一メートル）程だが、その穴の幅も均一に一クーデ（五十センチ）程だろう。

そして、深さは……見えなかった。

かろうじて、子供一人が立っていられるだけの足場は残っているものの、全方位を断崖絶壁にされたも同然である。

ふと、アルⅡイクシルが思いついたように声を上げた。あれだけの異能を完全に制御し、その上消耗の気配はまるでなかった。

「ああ、早くその穴を飛び越えたまえ。調子に乗って、深さを二〇クーデ（十メートル）に設定してしまった。落ちたら、一大事だ」

鶴は顔が真っ青になっていたが、言葉の意味を理解したらしい。すぐに幅跳びの要領で、突如発生した断崖絶壁から脱出する。しかし、転落死の危機から逃れた後も鶴の震えは止まらない。

当然だろう。大地にあれだけ深い穴を穿つなど、単純な破壊力だけでも鶴の《緩慢なる皆既食》に比肩する。そして、恐怖すべきはそんな『破壊力』などという概念そのものが、彼には通用しそうにないということなのだ。

——第一、穴を掘ったのであれば、土砂をどこにやった？

その最初の烈風と寒気から推察できる答えは……

——真空と入れ替えた？

やはり原理は不明だ。だが、気体の圧力は体積に反比例し絶対温度に比例する。そして、大気と大地の一部が突如として真空に入れ替われば、周囲の大気と大地は——実際には大気のみが——その空白を埋め合わせようと、真空の部分に移動しようとする。この大気の膨張現象が烈風として、フウルウたちには観察された。この時、埋め合わせのために大気の体積が膨張した分、圧力が低下し、温度も低下する。これが寒気としてフウルウたちに認識された。

おそらく、鶴も同じように理解したのだろう。

いや、より巫術師として卓越している分、その凄まじさにより驚愕しているのだ。

「……これで、わかったろう？」

宥めるようなアル||イクシルの一言。それに対し、鶴は「畜生」と返した。

「畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生っ！」

「無意味だ。無価値だ。君の方がわかっているはずだ。将来はともかく、現状の君に勝ち目はない」

「そうやって、あんたは上から、見下して……！」涙目のまま、しかし、それでも鶴は《夔》を構え、また、言霊を紡ぎかける。『……棺よ。蛇よ、火よ、雨よ、月よ、翼よ……！』

「やめなさいっ！ 乗っ取られるぞ！」

アル||イクシルは初めて大声で怒鳴りつける。鶴は一瞬ビクッと体を震わせた。

「悪かった。大人気なかった。少し調子に乗って、からかいすぎた。でも、その消耗した状態で《神憑り》を使うのはやめるんだ」

これまで絶対の余裕に満ちていた賢者の言葉に焦りが垣間見えていた。

「鶴姫命よ、阿翦から注意を受けていなかったか？ 《神憑り》の類はその名の通り神憑った力を引き出せるが、それは巫術師の力ではない。巫術師が形成した擬似人格が使役する精霊の力だ。その数多の擬似人格がすべて巫術師に従うものだとは限らない。いや、むしろ、主客の逆転が起こることが多い」

「知っているわよ」鶴は歪んだ笑みと共に答えた。「もっとも、あんたみたいな駄目人間のように、素となる干渉力がでたらめに低ければ、巫術師を乗っ取るほどの擬似人格は確率的に発生しないけどね」

「わかっているなら、もうやめろ。僕らと違って、人工的にシステムを構築し把握している分、危険への対策も充実しているようだが、限界もあるはずだ。君の素となる干渉力は少なくとも、平均以上だ。無理をすればすぐに……」

「いいわよ。別に乗っ取られても」黒衣の少女は当たり前のように、そして清々しく、憎

悪を吐き出した。「あんたの書き残した論文にあったわよね。『……このように形成され、表出した擬似人格は根本が単純な精神因子であるが故か、あるいはその複合結果であるが故か、極めて原始的な感情、すなわち、闘争心や破壊欲の権化となることも多い……』つて。それなら、あなたを殺そうするはずよね。構わないわっ！ あんたを殺せるなら、たとえ、わたしは死んだっていいっ！」

「……鶺鴒」

フウルウは今まで出したことのない声を出した。

しかし、興奮し、逆上し、息を乱すばかりの少女にその声は届かない。

アル・イクシルは明らかに慌てた様子で「なら、せめて、弩弓で狙うとか、食事に毒を盛るとか、他にも方法が……」と語りかけ、鶺鴒は駄々を捏ねた子供のように「うるさいっ！ 黙れ黙れ！」と叫び続ける。

しかし、フウルウの頭には入ってこなかった。

それだけ、フウルウがまずやらねばならないことははっきりとしていた。

フウルウとて、知識階級の端くれ。当然の如く巫術に関する造詣もある。少なくとも、こちらに気を取られていない小さな魔女の『呪い』を解くなど容易い。

だから。

フウルウは黙って、対峙する二人の間に再び割り込む。そして、鶺鴒の方を向いて

パン。

「……フウルウさん……？」

理性的なフウルウらしくもなく、一言もないままに上げられた手。信じられないといった様子の鶺鴒。しかし、フウルウは淡々と、そして辛辣に口を開いた。

『「あんたを殺せるなら、たとえ、わたしは死んだっていい」とはなんだ？ あの方は君のこと案じておられるのだぞ。甘えるのもいい加減にしろ、孺子が」

「でもっ！」

パン。

再び、少女の頬に振り下ろされるフウルウの手の平。さらにおよそフウルウらしくない言葉が次に続く。

「まだ言わせるか？ まして、あの方は君の師母の御学友だ。それが目上の者に対する態度か？」

鶺鴒は何も言わずにただ反抗的な目を向ける。だが、フウルウはそれだけのことで……、

パン。

「そもそも、争う意志も必要もない相手に先に手を出したのは君だ。まず、謝りなさい」少女は何か信じられないものを見る目で、己の傀儡を見た。これまでもフウルウが鶺鴒に酷いことを言ったことはあった。だが、それも激情に由来するものだった。冷静な判断の

下ではなかった。まして、手を上げるなど絶対になかった。

「……ピヤオ・フウルウの……馬鹿——っ！」

鶴は何もかもが嫌になって、その場から逃げ出した。